

## 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因

“REPRINTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から

|                            |                  |                |                            |                           |                             |                            |                            |                            |
|----------------------------|------------------|----------------|----------------------------|---------------------------|-----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| フジワラ<br>藤原 佳典*             | ヨシノリ<br>ヨシノリ 直紀* | ワタナベ<br>渡辺 直紀* | ナオキ<br>西 真理子*              | シ<br>西 真理子*               | マリヨ<br>李 相 諭*               | イ<br>李 相 諭*                | サン<br>李 相 諭*               | ユン<br>李 相 諭*               |
| オオハ<br>大場 宏美*              | ヒロミ<br>吉田 裕人*    | ヨシダ<br>吉田 裕人*  | ヒロト<br>佐久間尚子 <sup>2*</sup> | サク<br>佐久間尚子 <sup>2*</sup> | マナオ<br>マナオ 尚子 <sup>2*</sup> | フカヤ<br>深谷 太郎*              | タロウ<br>深谷 太郎*              | タロウ<br>深谷 太郎*              |
| コウサ<br>小宇佐陽子*              | ヨウコ<br>井上かず子*    | イノウエ<br>井上かず子* | カズコ<br>天野 秀紀*              | アマノ<br>天野 秀紀*             | ヒデノリ<br>内田 勇人 <sup>3*</sup> | ウチダ<br>内田 勇人 <sup>3*</sup> | ハヤト<br>内田 勇人 <sup>3*</sup> | ハヤト<br>内田 勇人 <sup>3*</sup> |
| カクノ<br>角野 文彦 <sup>4*</sup> | フミヒコ<br>新開 省二*   | シンカイ<br>新開 省二* | ショウジ<br>新開 省二*             | ショウジ<br>新開 省二*            |                             |                            |                            |                            |

**目的** 2004年6月より高齢者による学校ボランティア活動（絵本の読み聞かせ）を通じた児童との世代間交流型介入研究“REPRINTS”（Research of Productivity by Intergenerational Sympathy）を開始した。対象児童の高齢者イメージの関連要因，および“REPRINTS”ボランティア（以下，ボランティアとよぶ）の1年間の活動により，対象児童の高齢者イメージがどのように変化したかを検証する。

**方法** 川崎市立A小学校（住宅地，児童数470人）を対象にボランティア4～6人が週2日訪問し，絵本の読み聞かせを継続した。ボランティア試験導入開始1か月後に初回調査，その後，6か月ごとに第二回，第三回調査（集合・自記式アンケート）を行った。調査項目は，基本属性，SD（Semantic Differential）法による高齢者の情緒的イメージ尺度10項目短縮版（「評価性」因子6項目と「活動性・力量性」因子4項目），祖父母との同居経験，祖父母等の高齢者との交流経験（以降，高齢者との交流経験総得点とよぶ），ボランティアから読み聞かせをしてもらった経験（以降，読み聞かせ経験とよぶ），社会的望ましき尺度短縮版。

**結果** 多重ロジスティック回帰モデルにより初回調査で「評価性」因子得点が高い（高齢者に対し肯定的なイメージをもつ）ことに関連要因は低学年，高齢者との交流経験総得点高値が，「活動性・力量性」因子得点が高いことに関連要因は低学年，男子，社会的望ましき尺度短縮版高値が抽出された。

次に，初回，第二回（6か月後），第三回調査（12か月後）のうち，二回以上の調査で，「読み聞かせ，あり」と回答した児童を読み聞かせ経験の高頻度群（170人），一回以下の児童を低頻度群（175人）とし，これら二群の「評価性」因子と「活動性・力量性」因子の得点変化を一般化線形モデル（学年，性，高齢者との交流経験総得点，社会的望ましき尺度短縮版を調整）により評価したところ，「評価性」因子の群間と調査回数に交互作用がみられた（ $P=0.012$ ）。

**結論** 高齢者イメージは児童の成長とともに低下する可能性があるが，“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度が高い児童では，1年後も肯定的なイメージを維持しうることが示唆された。

**Key words**：シニアボランティア，世代間交流，児童，高齢者イメージ

\* 東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム

<sup>2\*</sup> 東京都老人総合研究所自立促進と介護予防研究チーム

<sup>3\*</sup> 兵庫県立大学環境人間学部

<sup>4\*</sup> 滋賀県東近江地域振興局地域健康福祉部  
連絡先：〒173-0015 東京都板橋区栄町35-2  
東京都老人総合研究所社会参加とヘルスプロモーション研究チーム 藤原佳典

## 1 緒 言

日本の老年人口（65歳以上）の割合が21.0%で世界最高になる一方，年少人口（15歳未満）は13.6%で最低となったことが，2005年国勢調査の抽出速報集計結果（2006年6月30日総務省発表）で明らかになった。近年，少子高齢化や若年層の

ニート・フリーターが深刻化するにつれ高齢者施策を支えるための若年層の負担が問題視される中で、高齢者が自己の利益のみを追求するアドボカシー活動を活発化させることは公共政策において世代間の対立を導きかねないとの指摘がある<sup>1)</sup>。こうした指摘は米国ではすでに1990年代初頭から出され、その解決を模索すべく、地域における世代間の共生・共益、つまり‘Win-win’ situation<sup>2)</sup>をねらったパイロット事業が、保健・福祉・教育分野で進められてきた<sup>3,4)</sup>。

わが国では、近年、学校支援ボランティアに注目が集まっている。その背景として、平成14年度から施行された新学習指導要領において「開かれた学校づくり」を進めるために、地域の教育力を生かし、家庭や地域社会との連携・支援を積極的に受けるべきであるとの見解が示されたことが挙げられる。また、少子高齢化が学校教育の現場におよぼしている影響も無視できない。児童の減少に伴う学校の小規模化は一校あたりの教職員の配置数を減少させた。少数の教職員集団だけで多様化する教育課題への対応が必ずしも容易ではなくなってきたことも一因として挙げられる<sup>5)</sup>。

一方、核家族化、プライバシー保護・匿名化のもとコミュニティの崩壊が進むわが国においては、一度疎遠となった世代と世代をつなぐには自然発生的でインフォーマルな交流のみでは不十分で、熟慮された「仕掛け（プログラム）」を要するとの指摘がある<sup>6)</sup>。

こうした社会的背景を踏まえ、筆者らは、平成16年度より厚生労働科学研究費補助金の助成を受けて、絵本の読み聞かせを主な活動とする高齢者による学校支援ボランティアを養成した。これら高齢者ボランティアと児童との世代間交流による相互の効果を調べるパイロット研究“REPRINTS” (Research of Productivity by Intergenerational Sympathy) を開始した<sup>7,8)</sup>。

“REPRINTS”の第一のねらいは、地域高齢者がボランティア活動を通して社会的役割と知的能動性を賦活し、心身の健康を維持することである。第二のねらいは、絵本の読み聞かせを通して児童の図書・文学への関心を高めるとともに、高齢者への敬愛の念を深めることで児童の情操教育の一助となること、更には地域における世代間の信頼を維持・促進することである。現代のわが国

の子供を取り巻く環境の特徴として、核家族化や少子化の進展や携帯電話・インターネットの普及にみられる生活の利便性に伴い、地域社会での対人交流が質的量的に希薄になり、人間関係を構築する訓練が不十分になりがちであるとの指摘がある<sup>9)</sup>。また、児童は学校生活の中で教師をはじめ親以外の大人と接することにより、多様な価値観を感受することが人格の発達に好影響をもたらすと指摘されている<sup>9)</sup>。

また、エイジズム研究の側面からは高齢者に対するイメージは、その悪化が高齢者軽視の風潮や高齢者虐待の原因となると言われている<sup>10)</sup>。本研究ではその評価指標の一つとして児童が抱く高齢者のイメージに着目した。ボランティア活動の受け手である児童にとって、高齢者世代とのコミュニケーション・信頼関係を持続するには、高齢者のイメージ低下を抑制さらには改善させることが重要と考えたからである。

しかし、人格形成期である未成年者、とりわけ人格の可塑性が高い幼児から小中学生の高齢者イメージについては、横断的な調査を行った先行研究がいくつか見られる<sup>11~16)</sup>のもの、学校教育の現場において、高齢者のイメージを継続的に高めうるプログラムを用いて、その効果を縦断的に検証した研究はわが国ではみあたらない。

本研究の目的は、“REPRINTS”ボランティアの1年間の活動が、児童の高齢者イメージに影響を及ぼす要因となりえたかどうかを検証することとする。

## II 対象と方法

### 1. “REPRINTS”プログラムの概要

対象地域は都心部（東京都中央区）、住宅地（川崎市多摩区）、地方小都市（滋賀県長浜市）を選び、2004年6月一般公募による60歳以上の第一期ボランティア67人〔年齢（平均±標準偏差）68.2±6.0歳、うち男性15人〕に対して、同年7月から3か月間（週1回2時間）のボランティア養成セミナーを開講した。東京都中央区と川崎市多摩区では当研究チームが主催し、滋賀県長浜市では同健康推進課が主催し、当研究チームが技術協力した。内容は共通して絵本・児童図書専門家、公立図書館司書や当該地域で先駆的に「読み聞かせ」活動を行っているインストラクターによ

る「絵本に関する知識・読み聞かせの実技」、社会福祉協議会職員等による「ボランティア論」、活動を予定している施設の教職員による「地域における子育て事情」や「学校教育の現状」、保健師、都老研スタッフによる「高齢期の健康づくり」とした。同セミナーを修了後、1学校あたり6～10人のグループに分かれ、順次、地域の公立小学校、幼稚園への定期的な「絵本の読み聞かせ」訪問活動を開始した。第一期ボランティアの受け入れ施設は計6小学校、3幼稚園であった。

## 2. 調査対象・方法

### 1) 調査対象

対象校は、平成16年10月“REPRINTS”ボランティア養成セミナー修了後、最も早く、絵本の読み聞かせによる訪問活動が開始された川崎市立A小学校であり、初回調査における1～6年生の全470人を対象児童とした。

### 2) ボランティアの介入方法

“REPRINTS”ボランティアの活動形態については、週2日訪問し、2校時と3校時の中間休み、および昼休み時間に図書室内の特設スペースで絵本の読み聞かせ会が開かれている。A校を担当する“REPRINTS”ボランティアは、あわせて7人（うち男性2人）で、年齢（平均±標準偏差）67.8±5.0歳であり、セミナー開始前の健康診査では、全員が高次生活機能において自立（老研式活動能力指標総得点<sup>17)</sup>が13点満点）しており、認知・心理検査、体力測定および医師、保健師らの面接の結果、健康状態はボランティア活動に支障なく、「良好」と判断された。1日あたり平均4～6人の“REPRINTS”ボランティアが登校し、当番2～3人が教壇に立ち、児童に直面して15～30分程度の読み聞かせの実演を行い、残りの2～3人は実演の補助と記録を担当した。読み聞かせ前後のボランティア間の打合せおよび実演を含めて計2時間程度、校舎内に滞在した。“REPRINTS”ボランティアが活動を開始して約1か月間を試験導入と呼び、読み聞かせのリハール等を行った。

### 3) 調査方法

試験導入終了直後（平成16年11月）に初回調査、その後、6か月毎に第二回、第三回調査を行った。

調査は、学級活動の時間等に自記式アンケートで行い、各学級担任が質問を読み上げながら進行

した。但し、初回調査のみ1・2年生は、保護者に調査実施マニュアルを事前に配布し、その監督下で手順に従って自宅回答させた。なお調査当日欠席した児童に対しては担任が個別に調査を実施した。

### 4) 調査項目

①児童の高齢者に対する情緒的イメージと、②そのイメージに関連すると思われる要因を調べた。

①高齢者に対する情緒的イメージは Semantic Differential（以下SDと略す）法による尺度<sup>14,16,18,19)</sup>を用いた。その際、中野のSD尺度18項目原版<sup>14)</sup>から10項目を選択し用いた。対極にある形容語対XとYについて、いずれが高齢者のイメージとしてよりあてはまるか、「とてもX」「どちらかといえばX」「どちらでもない」「どちらかといえばY」「とてもY」の5件法で回答を求め、「とてもX」から「とてもY」まで5点から1点を与え、3点を中立点とした。各項目の得点（以下、SD得点と称する）が高いほど一般的に肯定的なイメージを表す（SD総得点は50点満点）。なお、調査票では、肯定的なイメージを表す形容語と、否定的なイメージを表す形容語が左右どちらか一方に偏らないように考慮して左右を入れ替えて配置した。

なお、今回、10項目に減らした短縮版を用いた理由は、児童の高齢者イメージを尋ねる質問の形容語によっては、質問自体が高齢者に対する侮蔑的なイメージを児童に喚起する可能性があり、公教育の場では避けるべき<sup>20)</sup>と、調査実施校から指摘を受けたからである。そこで、まず中野のSD尺度18項目原版<sup>14)</sup>の各項目につき、A校ならびに“REPRINTS”を導入する都内小学校長および担当教師に道徳的・教育的視点からの判断を求め、両校で共通して不適切とされた「醜い—美しい」「汚い—きれい」「貧乏—お金持ち」「邪魔をする—手伝ってくれる」「だらしない—きちんとした」「愚かな—賢い」「鈍い—鋭い」の7項目を除いた11項目を選んだ。次に、18項目原版では高齢者の道徳的・倫理的側面を評価する尺度として命名された「評価性」因子（11項目）と高齢者の力強さや活動性を評価する「活動性・力量性」因子（7項目）からなる2因子構造を示していたため、この因子構造を維持するように、11項目に対して因子分析を行った（主因子法、Promax回転）。因

子負荷量が0.35未満の1項目「元気な一病気がちな」を削除し、残りの10項目について再度、因子分析を行った。その結果、「評価性」因子の6項目（寄与率33.3%）と「活動性・力量性」因子の4項目（寄与率14.2%）の2因子構造が保たれ、SD尺度10項目短縮版とした。同短縮版の併存的妥当性の確認にあたっては、SD尺度18項目原版（初回調査時のみ18項目全問を尋ねた）との間のPearson相関係数を算出したところ、「評価性」因子（原版11項目、短縮版6項目）、「活動性・力量性」因子（原版7項目、短縮版4項目）いずれも $r=0.92$ （共に、 $P<0.001$ ）であった。本尺度の内的一貫性はCronbachの信頼性係数 $\alpha$ において、「評価性」因子、「活動性・力量性」因子のそれぞれが0.76、0.70であった。

②児童の高齢者に対する情緒的イメージに関連する要因として、個人属性（学年、性別、同居家族数）の他、a)祖父母との同居経験、b)祖父母等の高齢者との交流経験（以降、高齢者との交流経験と称す）、c)「おとしより」と思う年齢、d)“REPRINTS”ボランティアから読み聞かせをしてもらった経験（以降、読み聞かせ経験と称す）、e)児童用社会的望ましき尺度を想定した。a)祖父母との同居経験は「現在同居している」、「過去に同居した経験あり」、「同居経験なし」の三つのうち該当するものを答えさせた。b)高齢者との交流経験は吉田らの11項目<sup>12)</sup>から、「泊まりがけの旅行をした」、「遊園地、映画、食事など日帰りのお出かけをした」、「おもちゃや洋服を買ってもらう」、「一緒に遊んでもらう」、「童話、昔話を読んでもらう」、「勉強を教えてもらう」、「なぐさめ、話を聞いてもらう」、「看病してもらう」、「幼稚園、保育園の送迎をしてもらう」、「誕生日等に特別の食事、おやつを作ってもらう」の10項目をそのまま用い、原文の「お年玉等をもろう」は「子供だけで家を訪問した」と改訂し、合計11項目として用いた。改訂した理由は複数の担当教師と設問を吟味した際に「お年玉等をもろう」と「おもちゃや洋服を買ってもらう」ことを分離する必要性が低いことと、先行研究<sup>12)</sup>において「泊まりがけの旅行をした」と回答した児童が最も少なかったことから、帰省を含めた祖父母の家への訪問を問う設問を付加した。これら11項目について幼少期の経験を尋ね、それぞれ「あり」を1点とした場合

の合計点（11点満点）を算出し、高齢者との交流経験総得点とした。同尺度の内的一貫性はCronbachの信頼性係数 $\alpha=0.76$ であった。なお、原版と改訂版のPearson相関係数は0.98（ $P<0.001$ ）であった。c)「おとしより」であると思う年齢については、想定する年齢を回答欄に数字で記入させた。

d)読み聞かせ経験は、初回調査時（試験導入後）、第二回および第三回調査時に毎回、「よく、絵本を読んでもらっている」、「ときどき、絵本を読んでもらっている」、「絵本を読んでもらっていない」の三択で尋ね、「よく、絵本を読んでもらっている」または「ときどき、絵本を読んでもらっている」と回答した場合を「読み聞かせ、あり」とし、「絵本を読んでもらっていない」を「読み聞かせ、なし」と定義した。

e)児童用社会的望ましき尺度は中谷の7項目短縮版<sup>13)</sup>を用いた。同短縮版尺度は桜井の児童用社会的望ましき尺度25項目原版<sup>21)</sup>のうち、25項目全体の得点と各項目の偏相関係数が高いものから順に選抜されたものである。桜井の25項目原版と中谷の7項目短縮版のPearson相関係数は0.87（ $P<0.001$ ）、同短縮版の内的一貫性はCronbachの信頼性係数 $\alpha=0.72$ であった。児童用社会的望ましき尺度を説明変数として用いた理由は、自記式のSD尺度を用いる場合には、質問への回答が社会的に望ましいと思われる方向に偏向される（本研究でのSD法では高齢者に対して肯定的な回答を選んでしまう）ことを考慮する必要があるからである<sup>14)</sup>。

### 3. 分析対象・方法

#### 1) 分析対象

初回調査で有効回答が得られたのは、441人（有効回答率：93.8%）であった。そのうち、SD得点の回答に欠損のなかった1~6年生437人に対して、次の横断分析2)、3)を行った。

#### 2) 児童の高齢者イメージの現状

学年ごと（1-2年、3-4年、5-6年の3群）のSD得点を記した。次に、高齢者イメージ（SD得点）に関連する要因を調べるため、初回調査におけるSD得点を中央値により低得点群と高得点群に分けたところ、それぞれ、「評価性」因子は、6-22点（ $n=211$ ）と23-30点（ $n=222$ ）、「活動性・力量性」因子は4-11点（ $n=204$ ）と12-20点（ $n$

=233)であった。児童の個人属性(学年, 性, 同居家族数), 祖父母との同居経験, 高齢者との交流経験総得点, 「おとしより」と思う年齢, “REPRINTS”試験導入中(以下, 試験導入中と称す)のボランティアによる読み聞かせ経験の有無, 社会的望ましき尺度短縮版の成績について, 低得点群および高得点群の2群間で $\chi^2$ 検定またはMann-WhitneyのU検定により比較した。

#### 3) 高齢者イメージに関連する要因

「評価性」因子ならびに「活動性・力量性」因子が高いことの関連要因を明らかにするために, 両因子の得点の高低二群間で有意差がみられた変数にはステップワイズ法を用い, 多重ロジスティック回帰分析を行った。

#### 4) 高齢者イメージの推移分析

“REPRINTS”ボランティアの活動が, 児童の高齢者イメージに与える影響を調べるために, 児童側からみた“REPRINTS”ボランティアによる絵本の読み聞かせへの暴露の多寡と児童の高齢者イメージの変化との関連を分析した。1年間の追跡が可能であった1~5年生402人のうち, 回答に欠損のなかった345人を対象に3回の調査を行った。初回調査, 第二回調査(6か月後), 第三回調査(12か月後)のうち, 二回以上の調査で, 「読み聞かせ, あり」と回答した児童を高頻度群(170人), 一回以下の児童を低頻度群(175人)とした(内訳は三回の調査のうち, 3回全て, 2回, 1回, 0回ありと回答した児童はそれぞれ, 105人-30.4%, 65人-18.8%, 63人-18.2%, 112人-32.5%)。これらの二群について, 「評価性」因子と「活動性・力量性」因子の得点変化をそれぞれ初回調査から第三回調査にかけて観察した。解析は学年, 性, 高齢者との交流経験総得点, 社会的望ましき尺度短縮版を調整した一般化線形モデルを用いて, 群と調査の回数による主効果および群×調査回数の交互作用効果を評価した。以上の統計処理はSPSS13.0J for Windowsを用い, 統計的有意水準はすべて $P<0.05$ とした。

#### 4. 倫理面への配慮

“REPRINTS”ボランティアとの交流により児童の高齢者イメージがどのような影響を受けるかを明らかにするためには, 対象者個人を同定してイメージの変化を縦断的に観察する必要があるが, 同時に個人情報保護の観点からは個人を特定

できない形でデータを取り扱う必要もある。そこで, 対象者には調査ごとにID番号を付与した上, ID番号と学籍番号の連結表・学籍番号と氏名の連結表は学校側が厳重に管理し, 初回調査のID番号と追跡調査のID番号の対応データのみを当方が学校から受け取り両調査のデータを連結するという, 連結可能匿名化処理を行った。本研究は事前に東京都老人総合研究所倫理委員会の審査で承認された。

### III 結 果

表1に初回調査における学年別にみた高齢者イメージの成績を示した。全体で, 高成績の項目は「温かい」, 「良い」であり, 低成績の項目は「はよい」, 「大きい」であった。学年間では「話しやすい—話しにくい」, 「はよい—おそい」を除く全ての項目で傾向性の検定におけるKendallの順位相関係数が有意であった。

表2に初回調査における, 「評価性」因子および「活動性・力量性」因子の両得点をそれぞれ, 中央値で高低2群に分割した児童の特徴を示した。児童全体で「祖父母との同居経験なし」は73.7%と高かった。「評価性」因子では, 学年, 高齢者との交流経験総得点と社会的望ましき尺度短縮版で, また「活動性・力量性」因子では学年, 性, 社会的望ましき尺度短縮版において, それぞれ, 高低両得点群に有意差がみられた。

表3に初回調査における, 「評価性」因子および「活動性・力量性」因子の両得点と関連のある要因をそれぞれ示した。表1で「評価性」, 「活動性・力量性」いずれかの因子の高低に有意差がみられた学年, 性, 高齢者との交流経験総得点, 社会的望ましき尺度短縮版にステップワイズ法を用い多重ロジスティック回帰モデルで分析した。「評価性」因子が高いことの関連要因は低学年, 高齢者との交流経験総得点が高いことであった。「活動性・力量性」因子が高いことの関連要因は低学年, 男, 社会的望ましき尺度短縮版の得点が高いことであった。

図1に「読み聞かせ」経験の高頻度群と低頻度群の初回調査(介入開始時)から第三回調査(介入開始1年後)までの「評価性」因子ならびに「活動性・力量性」因子の得点変化をそれぞれ示した(学年, 性, 高齢者との交流経験総得点, 社

表1 初回調査における学年別にみた、児童の高齢者に対する情緒的イメージ (SD<sup>1)</sup>) 尺度の成績

|      |                  | 1-2年 (n=140) | 3-4年 (n=154) | 5-6年 (n=143) | 検定       |
|------|------------------|--------------|--------------|--------------|----------|
|      |                  | 平均値±標準偏差     | 平均値±標準偏差     | 平均値±標準偏差     | $\tau^2$ |
| SD項目 | 温かい-冷たい          | 4.2±1.1      | 4.3±0.8      | 4.1±0.8      | -0.09*   |
|      | うれしい-悲しい         | 3.8±1.2      | 3.7±1.1      | 3.3±0.8      | -0.20*** |
|      | 正しい-正しくない        | 4.1±0.9      | 3.8±0.9      | 3.7±0.9      | -0.18*** |
|      | 素晴らしい-ひどい        | 4.1±0.9      | 3.7±0.9      | 3.6±0.8      | -0.20*** |
|      | 話しやすい-話しにくい      | 3.6±1.3      | 3.4±1.3      | 3.4±1.3      | -0.06    |
|      | 良い-悪い            | 4.2±0.9      | 4.2±0.9      | 4.0±0.8      | -1.11*   |
|      | 下位尺度-「評価性」因子     | 24.0±4.3     | 23.2±3.9     | 22.0±3.5     | -0.17*** |
| SD項目 | 忙しい-ひまそう         | 3.8±1.2      | 3.2±1.2      | 2.9±1.2      | -0.25**  |
|      | はやい-おそい          | 2.7±1.3      | 2.7±1.1      | 2.6±1.0      | -0.02    |
|      | 大きい-小さい          | 3.0±1.2      | 2.9±1.0      | 2.6±1.0      | -0.12**  |
|      | 強い-弱い            | 3.1±1.3      | 2.8±1.0      | 2.8±1.0      | -0.10*   |
|      | 下位尺度-「活動性・力量性」因子 | 12.6±3.4     | 11.6±2.7     | 10.9±3.2     | -0.18*   |

\*  $P < 0.05$ , \*\*  $P < 0.01$ , \*\*\*  $P < 0.001$  <sup>1)</sup> Semantic Differential, <sup>2)</sup> 傾向性検定: Kendall の順位相関分析 ( $\tau$ ) を用いた。

表2 初回調査における児童の高齢者に対する情緒的イメージ (SD<sup>1)</sup>) の下位二因子の高低別にみた児童の特徴

|                           |           | 「評価性」因子                  |                           |                          | 「活動性・力量性」因子              |                           |                          |
|---------------------------|-----------|--------------------------|---------------------------|--------------------------|--------------------------|---------------------------|--------------------------|
|                           |           | 低得点群<br>(6-22点)<br>n=211 | 高得点群<br>(23-30点)<br>n=222 | 有意差検定 <sup>1)</sup><br>P | 低得点群<br>(4-11点)<br>n=204 | 高得点群<br>(12-20点)<br>n=233 | 有意差検定 <sup>1)</sup><br>P |
|                           |           | %                        | %                         |                          | %                        | %                         |                          |
| 学年                        | 1-2年      | 25.1                     | 38.7                      | <0.001                   | 24.5                     | 38.2                      | <0.001                   |
|                           | 3-4年      | 33.2                     | 36.5                      |                          | 32.8                     | 37.8                      |                          |
|                           | 5-6年      | 41.7                     | 24.8                      |                          | 42.6                     | 24.0                      |                          |
| 性                         | 女         | 52.1                     | 47.3                      | 0.337                    | 56.4                     | 42.9                      | 0.005                    |
| 同居家族数                     | 平均±標準偏差   | 4.5±1.4                  | 4.4±1.2                   | 0.692                    | 4.4±1.2                  | 4.5±1.4                   | 0.320                    |
| 祖父母との同居経験                 | 現在同居中     | 18.4                     | 16.2                      | 0.753                    | 18.6                     | 15.9                      | 0.895                    |
|                           | 過去に同居経験あり | 9.2                      | 7.4                       |                          | 8.0                      | 7.9                       |                          |
|                           | 同居経験なし    | 72.3                     | 76.4                      |                          | 73.4                     | 76.2                      |                          |
| 祖父母等の高齢者との交流経験総得点         | 平均±標準偏差   | 6.3±2.8                  | 7.0±2.6                   | 0.006                    | 6.6±2.7                  | 6.8±2.7                   | 0.531                    |
| 「おとしより」と思う年齢              | 平均±標準偏差   | 64.0±8.2                 | 64.0±8.3                  | 0.938                    | 64.1±8.3                 | 63.8±8.2                  | 0.680                    |
| 試験導入中の交流 <sup>2)</sup> あり | 会話        | 26.7                     | 31.7                      | 0.290                    | 31.0                     | 26.8                      | 0.341                    |
|                           | 読み聞かせ     | 33.3                     | 41.2                      | 0.111                    | 33.0                     | 41.1                      | 0.091                    |
| 社会的望ましさ尺度短縮版              | 平均±標準偏差   | 3.5±1.8                  | 3.9±1.9                   | 0.021                    | 3.4±1.7                  | 4.0±1.9                   | 0.001                    |

<sup>1)</sup> 有意差検定: カテゴリー変数については  $\chi^2$  検定, 連続変数については Mann-Whitney の U 検定を用い,  $P < 0.05$  を有意差ありとした。

<sup>2)</sup> ボランティアが活動を開始して約1か月間を試験導入と呼び, 読み聞かせのリハーサルを行った。

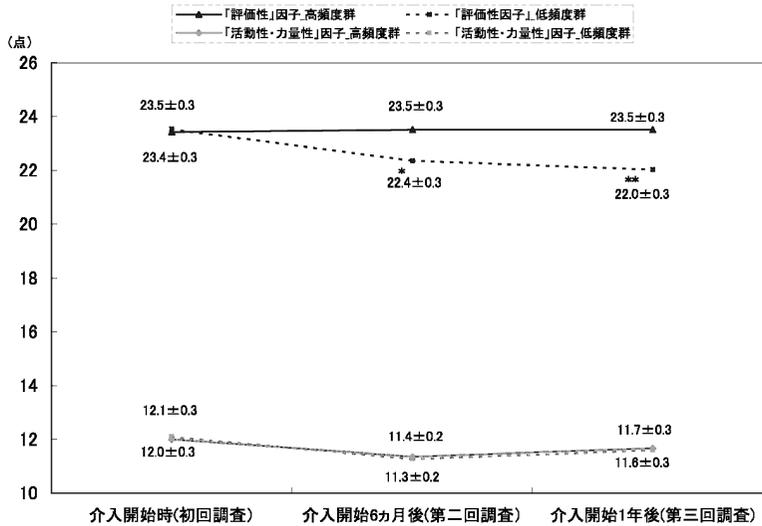
表3 初回調査における児童の高齢者に対する情緒的イメージ (SD) が高いことに関連要因<sup>1)</sup>

| 変数, 比較カテゴリー/<br>基準カテゴリー      | 「評価性」因子              |           |       | 「活動性・力量性」因子          |           |        |
|------------------------------|----------------------|-----------|-------|----------------------|-----------|--------|
|                              | Odds 比 <sup>2)</sup> | 95%信頼区間   | P     | Odds 比 <sup>2)</sup> | 95%信頼区間   | P      |
| 学年, 3-4年/1-2年                | 0.91                 | 0.55-1.51 | 0.721 | 0.82                 | 0.48-1.38 | 0.449  |
| 5-6年/1-2年                    | 0.43                 | 0.26-0.70 | 0.001 | 0.38                 | 0.23-0.65 | <0.001 |
| 性, 女/男                       | —                    | —         | —     | 0.51                 | 0.34-0.77 | 0.002  |
| 祖父母等の高齢者との交流経験総得点,<br>1点上昇ごと | 1.11                 | 1.03-1.20 | 0.007 | —                    | —         | —      |
| 社会的望ましき尺度短縮版, 1点上昇<br>ごと     | —                    | —         | —     | 1.15                 | 1.02-1.29 | 0.024  |

<sup>1)</sup> SD 尺度の下位二因子の2群 (高得点群/低得点群) を従属変数とした多重ロジスティックモデル (ステップワイズ法: 学年, 性, 祖父母等の高齢者との交流経験総得点, 社会的望ましき尺度短縮版を投入) を用いた。

<sup>2)</sup> 基準カテゴリーに対する比較カテゴリーの Odds 比

図1 “REPRINTS” ボランティアによる読み聞かせ経験の多寡別にみた高齢者に対する情緒的イメージ (SD) の推移



注) 学年, 性, 祖父母等の高齢者との交流経験総得点, 社会的望ましき尺度短縮版を調整した。

図中の数値は「平均 ± 標準誤差」を示す。\*:  $P < 0.05$ , \*\*:  $P < 0.01$

会的望ましき尺度短縮版を調整)。「評価性」因子においてのみ, 群と調査回数の交互作用は有意であった ( $F = 4.43, P = 0.012$ ) が, 「活動性・力量性」因子では交互作用は有意でなかった。

#### IV 考 察

高齢者イメージに関する研究は1950年代に Tuckman らが中学生から大学生を対象として尺度を用いた調査を行って以来, 米国を中心に研究が集積されてきた<sup>22~25)</sup>。その多くは, 高齢者を

不活発, 物事に対する関心を欠如, 役割を喪失した存在として認識しており, 児童の多くが中学生ごろに既に高齢者に対するネガティブなイメージを形成していると報告している。わが国では SD 尺度を用いた研究は1975年以降に大学生を対象としたものがみられるが<sup>11)</sup>, 小・中学生を対象にした研究は1990年代初頭に散見されるに過ぎない<sup>13~16)</sup>。その内, 本研究と対象地域が類似する研究は東京都区内と埼玉県郡部の小学生を対象にした横断調査<sup>14)</sup>であり, 「おそい—はよい」「小

い—大きい」の項目において中立点の3点を下回っていたが（それぞれ2.98点、2.97点）、それ以外の項目ではすべて3点を上回り、全体として肯定的なイメージを抱いていた。本研究でも、初回調査では「おそい—はやい」（平均点2.7）、「小さい—大きい」（平均点2.8）が最下位の2項目であり、それ以外の項目では全て3点を上回り、先行研究<sup>14)</sup>の結果を再確認した。また、低学年、高齢者との交流経験が多いほど「評価性」因子、「活動性・力量性」因子の得点がともに高いことが示されていたが<sup>14)</sup>、本研究でも、「評価性」、「活動性・力量性」両因子とも低学年で得点が高く、高齢者との交流経験が多いほど「評価性」因子の得点が高かった（表3）。

初回調査の結果から、対象児童で「祖父母との同居なし」と回答した者は73.7%であり、核家族化を反映している。一方、平成2年度国勢調査および17年度同調査速報を比較すると、児童のいる世帯における家族類型別割合は、先行研究が実施された15年前と比べて、3世代同居世帯が26.8%から21.9%と減少し、ひとり親と子供からなる世帯は5.9%から9.0%と増加しており子供が家庭内で関わる大人の数は減少した。子供は母親など特定の大人とのみ密着し、友達のような関係を築く傾向にあり、家族内の関係構造の変容が指摘されている<sup>26)</sup>。しかし、子供が高齢者に対して抱くイメージは15年前の研究結果<sup>14)</sup>と同様に、同居家族数や祖父母との同居経験の有無には関連がみられず、幼少期の高齢者との交流経験が豊富か否かに依存していることが示され、少子・高齢化に伴う地域社会の変容があっても、交流経験を保つことによってイメージを良好に維持できる可能性が示唆された。

初回調査において、試験導入中の“REPRINTS”ボランティアからの読み聞かせ経験の有無は、「評価性」、「活動性・力量性」両因子とも有意な関連はなかった。しかし、本プログラムではボランティアによる読み聞かせは定期的に継続されている。よって、読み聞かせへの暴露経験の多寡は、試験導入中、6か月後、1年後の3回の調査における経験の有無の合計により高頻度群と低頻度群に2分することが妥当と考えた。

“REPRINTS”ボランティアからの読み聞かせの頻度が多い児童（高頻度群）は、1年間を通じ

て「評価性」因子得点が維持されていたが、低頻度群では低下した。2回の追跡調査において低頻度群の「評価性」因子得点が低下した要因としては、児童の心身の成長とともに自我の確立、高齢者を含む大人への盲従からの自立を表しているのかもしれない。

一方、本研究結果からは、高頻度群では、高齢者に対する認識の低下が抑制されるほどの影響を“REPRINTS”ボランティアとの交流を通じて受けた可能性がある。もし、同ボランティアとの交流が有効であるとすれば、以下の理由が考えられる。初回調査で、「評価性」因子が高い関連要因として高齢者との交流経験総得点が高いことが抽出された。読み聞かせ活動が繰り返されるにつれて、“REPRINTS”ボランティアとの会話の機会も増え、児童にとっては高齢者との交流経験が増えたと認識され、「評価性」因子の維持に結びついたのかもしれない。また、“REPRINTS”プログラムでは高齢者が絵本という媒体を通して、児童に「楽しさ、愛、平和、命」といったメッセージを伝えることをねらいとしている。こうした読み聞かせは、屋外活動のサポートや通学時の防犯パトロールといった「活動性・力量性」因子を想起する活動ではないが、朗読方法はしみじみと児童の情感に訴えかけるもので、「評価性」因子を維持する効果があったのかもしれない。さらに、“REPRINTS”ボランティアは児童を評価する立場にない点で教師とは異なり、他の児童の代弁者である保護者とも異なる第三者と位置づけられる。“REPRINTS”ボランティアとの交流を持つ児童は、自分を評価しない大人としての安堵感を持ち続けるため、「評価性」因子の得点が維持されやすいとも考えられる。

## V 本研究の限界

本研究では、協力校の制約上、対照群を設定できなかったため“REPRINTS”ボランティアとの交流が有効であったと言えない可能性もある。たとえば、同ボランティアによる高頻度の読み聞かせに効果があるのではなく、低頻度の疎な交流では却って高齢者イメージを悪化させるとも解釈できる。

よって、本研究は観察型の疫学研究としての限界を有し、“REPRINTS”ボランティアからの読

み聞かせを高頻度に受けた群と低頻度の群間でみられた諸特性の差が、その後の高齢者イメージに影響をおよぼす可能性は否定できない。そこで、本研究では、2群間で差がみられ、かつ観察期間中の高齢者イメージに影響をおよぼす要因として、学年、性、高齢者との交流経験総得点、社会的望ましき尺度短縮版をモデルに強制投入することにより“REPRINTS”プログラム単独の効果の有無を検証せざるを得なかった。こうした方法をとってもその他の交絡要因の影響を除外できていない可能性がある。しかし、多忙な教師の協力・指示のもと、授業時間を割愛し道徳的側面を尋ねるアンケートを実施することはボランティア受け入れ校においてさえ容易ではない。ましてや“REPRINTS”を受け入れていない近隣学校に対して対照群として追跡調査の協力を得ることは行政機関の後援をもってしても困難であった<sup>27)</sup>。

一方、公立小学校の本務が平等・公平な教育の提供であることは言うまでもない。よって“REPRINTS”ボランティアとの交流を行わない、または遅れて開始する学級を設定することは極めて困難である。現在、“REPRINTS”ボランティアを導入する3地域全23施設(幼稚園、児童館等を含む)における、「読み聞かせ」の実施環境についても時間帯、交流形式などを厳密に統一することはできない。さらに、アンケートに用いた調査項目については、調査時間の短縮と教師や児童への負担の軽減を要したため、諸尺度の短縮版を用いた。とくに、SD尺度の短縮化の際には道徳的配慮も要したため8項目もの削除を余儀なくされた。尺度の妥当性・信頼性を確認し用いたが、削除された項目は高齢者に対する侮蔑的なイメージを喚起する項目に偏った。これらを削除した影響として本SD尺度短縮版が総体的に高齢者のプラスのイメージを尋ねるものとなった可能性は否定できない。しかし、ボランティアとは本来、クライアントの環境やニーズを最優先すべき活動である。よって、児童と“REPRINTS”ボランティアとの中長期的な交流を追跡していく上で、実行可能性を優先した。これら研究デザイン上の制約はあるものの、高齢者に対する児童の情緒面の変化を追跡した研究はわが国ではこれまでになく、貴重な分析であると考えた。その結果、トレンドを比較することにより、“REPRINTS”

ボランティアによる読み聞かせを頻回に経験することの効果の算出を試みた。核家族化が進み、情緒的な交流を身近な祖父母に求めることが容易ではない現代社会において、地域高齢者を次世代育成のソーシャルキャピタル(社会関係資本)<sup>28)</sup>の一つとするならば、子供と地域高齢者の信頼関係を構築するには情緒的な交流を重視し、その機会を頻回に設けることが重要であろう。

## VI 結 論

本研究では、児童の高齢者イメージは、横断調査から時代や社会の変容があっても、児童自身が経験してきた過去の高齢者との交流に影響されることが確認された。追跡調査からは“REPRINTS”ボランティアの1年間の活動によって、短時間であっても頻回に読み聞かせを経験した児童において高齢者に対する情緒的イメージが維持される可能性があることがわかった。以上より、高齢者と児童における世代間の信頼を維持・促進する手立ての一つが示唆された。今後、児童を介した“REPRINTS”プログラムの保護者世代への波及効果を調べることにより、地域での、さらなる世代間の信頼関係の広がりを検証していきたい。

本研究は厚生労働科学研究費補助金(長寿科学総合研究事業 H16-長寿-031「高齢者の社会参加・社会貢献の増進に向けた介入研究」(主任研究者 新開省二)の一環として行われた。本研究の実施に際し、多大なるご協力をいただいた、木村俊彦(川崎市立下布田小学校)、新垣英一、鈴木幹男(前同小学校)、熊谷裕紀子(同小学校教育ボランティア・コーディネーター)、向山行雄、佐久間明子(前中央区立阪本小学校)、古川卓也(同小学校)、植田たい子(同小学校図書指導員)の各氏に厚くお礼申し上げる。

(受付 2006.10.20)  
(採用 2007. 7.23)

## 文 献

- 1) 須田木綿子. 高齢者の社会参加と世代間交流. 老年精神医学雑誌 2003; 14: 878-883.
- 2) Stephen R. Covey, 川西 茂 (翻訳). 7つの習慣—成功には原則があった. 東京: キング・ベア出版, 1996.
- 3) Glass TA, Freedman M, Carlson MC, et al. Experience Corps: Design of an intergenerational program

- to boost social capital and promote the health of an aging society. *Journal of Urban Health* 2004; 81: 94-105.
- 4) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二. ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響—地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義—. *日本公衛誌* 2005; 52: 293-307.
  - 5) 佐藤晴雄. 学校を変える 地域が変わる—相互参画による学校・家庭・地域連携の進め方. 東京: 教育出版, 2002.
  - 6) 杉岡さとる, 倉岡正高. 今, なぜ世代間交流なのか. *社会教育* 2006; 61: 30-33.
  - 7) 藤原佳典, 西真理子, 渡辺直紀, 他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム—“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果—. *日本公衛誌* 2006; 53: 702-714.
  - 8) 藤原佳典. 高齢者の「一石三鳥」ボランティアを追求!—介護予防にはシニアによる絵本の読み聞かせが最適!—?. *公衆衛生情報* 2005; 1: 22-25.
  - 9) 堀野 緑, 濱口佳和. 子どものパーソナリティと社会性の発達. 京都: 北大路書房, 2000.
  - 10) Palmore EB, Branch L, Harris DK, eds. *Encyclopedia of Ageism (Religion and Mental Health)*. New York: Haworth Press Inc, 2005.
  - 11) Koyano W. Japanese attitudes toward the elderly: A review of research findings. *Journal of Cross-Cultural Gerontology* 1989; 4: 335-345.
  - 12) 吉田純子, 冷水 豊. 児童と老人との交流. *社会老年学* 1991; 34: 3-12.
  - 13) 中谷陽明. 児童の老人観—老人観スケールによる測定と要因分析—. *社会老年学* 1991; 34: 13-22.
  - 14) 中野いく子. 児童の老人イメージ—SD法による測定と要因分析—. *社会老年学* 1991; 34: 23-36.
  - 15) 馬場順子, 中野いく子, 冷水 豊, 他. 中学生の老人観—老人観スケールによる測定—. *社会老年学* 1993; 38: 3-12.
  - 16) 中野いく子, 冷水 豊, 中谷陽明, 他. 小学生と中学生の老人イメージ—SD法による測定と比較—. *社会老年学* 1994; 39: 11-22.
  - 17) 藤原佳典, 新開省二, 天野秀紀, 他. 自立高齢者における老研式活動能力指標得点の変動. *日本公衛誌* 2003; 50: 360-367.
  - 18) 井上正明, 小林利宣. 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. *教育心理学研究* 1985; 33: 253-260.
  - 19) 岩下豊彦. SD法によるイメージの測定. 東京: 川島書店, 1983.
  - 20) 高木正幸. 差別用語の基礎知識'99. 東京: 土曜美術社出版販売, 1999.
  - 21) 桜井茂男. 児童用社会的望ましき測定尺度の作成. *教育心理学研究* 1984; 32: 310-314.
  - 22) Tuckman J, Lorge I. Attitude toward old people. *J Soc Psychol* 1953; 37: 249-260.
  - 23) Tuckman J, Lorge I. Perceptual stereotypes about life adjustment. *J Soc Psychol* 1956; 43: 239-245.
  - 24) Tuckman J, Lorge I. Attitude toward aging of individuals with experiences with the aged. *J Genetic Psychol* 1958; 92: 199-204.
  - 25) Jantz RK, Seefeldt C, Galper A, et al. *The CATE: Children's attitudes toward the elderly (Test Manual)*. University of Maryland, Collage Park. 1976.
  - 26) 日本経済新聞社編. 少子に挑む. 東京: 日本経済新聞社, 2005; 223-233.
  - 27) 藤原佳典. 団塊・シニアボランティアのエビデンス—高齢者による学校支援ボランティア「りぷりん」との現場から—. *公衆衛生情報* 2006; 8: 95-98.
  - 28) 湯浅資之, 西田美佐, 中原俊隆. ソーシャル・キャピタル概念のヘルスプロモーション活動への導入に関する検討. *日本公衛誌* 2006; 53: 465-470.
-

## Regulatory factors for images of the elderly among elementary school students assessed through secular trend analyses by frequency of inter-exchange with “REPRINTS” senior volunteers

Yoshinori FUJIWARA\*, Naoki WATANABE\*, Mariko NISHI\*, Sangyoon LEE\*, Hiromi OHBA\*, Hiroto YOSHIDA\*, Naoko SAKUMA<sup>2\*</sup>, Taro FUKAYA\*, Youko KOUSA\*, Kazuko INOUE\*, Hidenori AMANO\*, Hayato UCHIDA<sup>3\*</sup>, Fumihiko KAKUNO<sup>4\*</sup>, and Shoji SHINKAI\*

**Key words** : Senior volunteer, Intergenerational relationship, Elementary school students, Images of the elderly

**Background and Purpose** We have launched a new intervention study, called “REPRINTS” (Research of productivity by intergenerational sympathy) in which senior volunteers aged 60 years and over engage in reading picture books to school children, regularly visiting public elementary schools since 2004. The purpose of this study was to clarify characteristics of images of older people held by elementary school children and factors associated with such images, as well as to examine changes in images through intervention by “REPRINTS” senior volunteers (volunteers) for the initial one year period.

**Methods** Subjects & setting: Four to six volunteers as a group visited A elementary school in a suburb Kawasaki city (470 students) twice a week to read picture books. The baseline survey was conducted one month after launching the volunteer activity. First and second follow-up surveys were conducted at 6 month intervals after the baseline survey.

Measurements: Grade, gender, short version of emotional-like image scale of older adults assessed by the SD (Semantic Differential) method (6 items in the subscale for “evaluation” and 4 items in the subscale for “potency/activity”), experience of living with grandparents, experience of interchange with older people, frequency of interchange with volunteers and the social desirability scale for children.

**Result** Related variables for a higher score in the subscale for “evaluation” included lower grade and abundant experience of interchange with older people such as grandparents. Those for “potency/activity” included lower grade, male gender, and a higher social desirability scale for children in the multiple logistic regression model.

Students were divided into two groups in terms of frequency of interchange with volunteers (low and high-frequency groups) through three surveys. In the subscale for “evaluation”, the general linear model demonstrated a significant interaction between the group and number of surveys adjusted for confounding factors.

**Conclusion** Although emotional images of older people significantly decline with advancing grade, those of students with a high frequency of interchange with volunteers were here found to be maintained more positively over one year compared to those with a low frequency.

---

\* Research Team for Social Participation and Health Promotion, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology.

<sup>2\*</sup> Research Team for Promoting Independence of the Elderly, Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology.

<sup>3\*</sup> School of Human Science and Environment, University of Hyogo.

<sup>4\*</sup> Higashi Oumi Regional Promotion Bureau of Shiga.